

平成30年度 宮崎県立農業大学校 学校経営方針及び学校評価表（評価結果 3月）

1 学校教育方針	2 教育目標	4 平成30年度 重点取組
<p>【農業大学校の使命】 農業県宮崎における実践教育機関として、本県の農業や食の未来を担う人材を育成する。</p>	<p>(1) 農場での実践学習により、確かな生産技術と柔軟な経営スキルを備えた人材を育成する。</p> <p>(2) 地域社会や地域農業の課題解決に主体的に取り組みながら、専門性を高めていく人材を育成する。</p> <p>(3) 地域社会における実践学習により、組織の中で自分を活かし、社会で活躍できる人材を育成する。</p>	<p>(1) 学校PRの強化等による入学定員(65名)の確保</p> <p>(2) 基本技術の習得の他、GAPやICTの取組の推進によるスマート農業への対応など、確かな生産技術や実践力の習得（2カ年のカリキュラムの検証と改善）</p> <p>(3) 模擬会社の本格始動を通じた経営能力の向上</p> <p>(4) きめ細かな進路指導による学生の進路実現</p>
3 本校で育む5つの力		
<p>①生産する力 ②経営する力 ③課題を解決する力</p> <p>④社会で活躍する力 ⑤自分を活かす力</p>		

○設置根拠 農業改良助長法第7条5項の規定に基づく「農業者研修教育施設」
学校教育法第124条の規定に基づく「専修学校」

☆印は、新たな取り組み、または特に強化する取組

○評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

評価項目		平成30年度目標と実績	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
学校全体	学生募集	<p>○65名定員の確保 (特に、就農に意欲のある入学者の確保)</p> <p>実績(見込み) 53名+α(達成率 81.5%)</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○県内52校の高校訪問を全職員で手分けして実施した。 ○県内8校の農業系高校との意見交換会や説明会を実施し、学生募集 ○進路ガイダンスは、年間15→24回に増やし積極的に参加した。 ○年間2回のオープンキャンパスでは、卒業生からのアドバイスするコーナーを加え、学校理解や興味関心を高められるように工夫した。 ○パンフレット等を見直し、プロモーションビデオによるPRに努めた。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●残念ながら受験者数の減少 農学26名、畜産36名 計62名が受験し、H31年度志願者倍率は0.95倍だった。 ●昨年度に比べ、受験者数が95→62名に減り、特に農学科の受験生減が顕著だった。現在53名(農学25名、畜産28名)が入学を希望しており、二次募集で2名の受験を予定している。 ●情報発信としてのFacebookの投稿数が少なく、随時発信に向けた対応を検討する必要がある。(Facebook投稿数193→70) 	B	B	・複数の手法で取り組んでほしい。
	学校教育	<p>○新しい教育計画に基づく実践力の習得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各専攻の基本となる主な資格 全学生(大特100%、農業簿記3級100%) 全フード学生(食品衛生責任者100%取得) <p>実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大特(95.3%) ・農業簿記(27.0%) ・食品衛生責任者(100%) 	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年間を通して、スムーズな教育課程の運用と改善に取り組んだ。また、学科改編後の見直しや改善にも努めた。 ○企業や大学、法人等と連携した教育を実施した。 ○指導力向上を目的に、全職員を対象にOJT研修を実施した。また、授業評価も実施した。 ○高等学校指導教諭の授業を参観し、授業の進め方や在り方について 研修し、指導力向上に努めた。 ○アグリビジネスや会社経営、ICT活用等の新たな学習内容を展開した。 ○模擬会社の運営を通して、販売促進や会社経営の学習を実践的に展開した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業評価により学生の理解度を把握することができ、授業改善に役立てることができた。 ○新教育計画に沿って、スムーズなカリキュラム(教育課程)の運用ができた。2ヶ年間の課題の改善し、次年度の教育計画に活かした。 ○ひなたGAP取得、GAPIに対応した集荷施設が完成した。 ●各専攻の基本となる主な資格取得は、大特95.3%、食品衛生100%、農業簿記27.0%だった。学生はもとより指導者の意識改革と指導体制の構築が必要である。 ●授業に対する取組が悪い学生が見受けられ、その改善が課題となっている。 	B	B	<p>・畜産試験場、総合農業試験場との連携が大事である。</p> <p>・JAや大学との連携を集約し、学生の取組を絡ませていくことが大事である。</p>

	評価項目	平成30年度目標と実績	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見	
学校全体	学校教育	担い手育成事業 (高大連携)	○魅力ある農業大学校づくりの推進 【取組】 ○国庫事業を活用して、県内の農業高校との連携を拡大し、先進地視察 研修等を行った。 ○国庫事業を活用して、外部講師を招聘しプロジェクト学習におけるマーケティングについて、高大連携による指導力研修会を実施した。 ○農大校視察を年間17回受け入れ、大学校の説明や授業参加、体験等を実施し連携を深めた。(昨年7回) ○企業等と連携し、チャレンジファームを活用した次世代農業モデルの授業を展開した。 【成果】 ○高校生が農大生と一緒に研修を行うことで、農大への関心・進学意識を高めることができた。また、高校生のキャリアデザインや農業法人への理解が深まった。 ●高大連携したプロジェクト学習を展開することで、5ヶ年間の充実した学習を展開している、学科や部門により取組に温度差が生じている。内容を精査し、さらには対象校を広げるなどさらなる充実を図っていくことが必要である。	A	A		
		自治活動	○学生自治組織の活性化とリーダー育成 【取組】 ○自治会の定例会を毎週実施し、学校・寮運営に学生が主体的に取り組んだ。 ○基本的な生活習慣の改善のために寮合宿を実施した。 ○関係機関と連携し、米づくり体験講座、食農連携わくわくアグリキッズ 2018等の食育活動を実施し、ハロイン祭や高鍋町灯籠まつりにも参加した。 【成果】 ○学生の自主性、自立性や企画・運営力、社会性が身についた。 ●規範意識が希薄な学生が多く見受けられるようになり、寮規則や指導 体制の見直しが必要である。	B	B	・学生の生き生きとした取組が見られる。 ・卒業式での学生の表情が良かった。	
	進路実現	進路支援	○年内100%進路決定 実績 95.6%	【取組】 ○ハローワークによる定期的な面談を年間15回実施し、学生の進路実現をサポートした。 ○早期の意識付けのために、年間3回の進路ガイダンスを実施した。 また1年生を対象に前倒しをして進路ガイダンスを実施する予定。 【成果】 ○3名が進路決定していないが、進路決定率95.6%である。 ●目的意識の希薄な学生に対する早期の意識付けが必要である。	A	A	
		担い手の確保	○就農支援体制の強化による 就農率60%以上の確保 実績 54%(達成率90%)	【取組】 ○法人マッチング(就職相談会)に68社が参加した。(昨年45社) ○次世代人材投資資金を有効的に活用している。1年(12名)、2年(15名) 【成果】 ○就農率54%(即就農9名、研修後就農1名、雇用就農27名)	A	A	

学科の教育目標 (育てる学生像)		本県で主に栽培されている品目を教材に取り上げ、その特徴や栽培技術、商品化技術、農産物の加工・販売についての実践学習を通して、確実な生産技術と経営スキルを身につけ、将来、本県農業に夢を持って意欲的に取り組む人材を育成する。				
評価項目		平成30年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
農 学 科	農業教育	○実践学習による本県主要作物の生産技術と経営スキルの習得	【取組】 ○農場長制度による生産農場の自主的な運営に取り組んだ。 ○ICT活用のための講義及び実習を実施した。 ○地域と連携した実践的なカリキュラムを実施した。 ○進路実現に繋がるインターンシップや校外学習の実施した。 ○地域での実践的な販売実習を実施した。	A	A	・GAPを含め、様々な成果をみせていくことが大事である。
		○適正な農場管理手法の習得 ☆目標:ひなたGAPの取得	【取組】 ○GAPを意識した農場・施設管理を実施した。	A	A	
	プロジェクト学習	○地域課題を踏まえたプロジェクト活動の実践	【取組】 ○県内農業高校と連携した地域連携型プロジェクト学習を実施した。 ○関係機関と連携し、地域課題解決に取り組んだ。	A	A	
キャリア教育	進路支援	○学生個人個人の進路設計のサポート ○自主的な進路情報収集能力の育成と自立支援 ○農業に夢を持って意欲的に取り組む人材の育成	【取組】 ○1年生の担任を中心に、専攻決定後から進路指導を実施した。 ○自主的な活動ができるよう日頃から支援を行なった。	A	A	

	評価項目		平成30年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
農学科	キャリア教育	資格取得等	○資格取得の推進	<p>【取組】</p> <p>○各種資格の情報提供及び取得の推進を行なった。</p> <p>【成果】</p> <p>○将来必要と思われる資格の取得をすすめ、試験対策を実施した。</p> <p>○資格取得を進めた結果、意識の高まった花専攻の学生2名が技能五輪に推薦され、内1名が銅賞を受賞することができた。</p> <p>日本農業技術検定 3級7名、2級3名 農業簿記 3級14名、日商簿記 3級4名 危険物乙種4類1名、4類以外2名 フラワー装飾 3級4名、2級2名、グリーンマスター 5名</p>	A	A	

学科の教育目標 (育てる学生像)		本県で主に飼育されている品種を教材に取り上げ、その特徴や飼育管理・繁殖管理・肥育管理技術、出荷の方法、畜産物の加工・販売についての実践学習を通して、確実な生産技術と経営スキルを身につけ、将来、本県畜産業に夢を持って意欲的に取り組む人材を育成する。				
評価項目		平成30年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
畜産学	農業教育	講義・実習	<p>○本県畜産に関する生産技術と経営スキルの習得</p> <p>【取組】 ○講義・実習を計画的に実施し、肉用牛及び酪農専攻は学生が自主的に農場管理に取り組み、養豚専攻は畜産試験場川南支場及び養豚法人で生産経営技術を学んだ。 ○ICT機器(牛歩、牛温患)を導入した畜舎で、省力化や個体情報を活用した高度な飼養管理を実践し、またGAPの取得を目的に113項目の自己点検に取り組んだ。</p> <p>【成果】 ○肉用牛、酪農、養豚の各専攻において、生産技術と経営スキルを習得することができた。 ●GAPでは約半数の項目について自己点検を実施し、牛舎内にヘルメットを架ける場所を設けて機械作業前に着用する取組等を行った。来年度はさらにレベルアップして全ての項目の点検を行う。</p>	B	B	
		プロジェクト学習	<p>○即戦力として地域の畜産業を担う人材の育成</p> <p>【取組】 ○インターンシップや自主企画研修による畜産法人や食肉製造企業での研修、また優良経営体や宮崎大学での校外学習を実施した。 ○農大祭において、プロジェクト学習で生産した肥育牛2頭分の牛肉を販売し、豚肉をベーコンに製造・販売した。</p> <p>【成果】 ○実践的な技術にふれさせたり、経営管理能力の重要性を認識させることができた。 ○生産物の直販畜産物に対する消費者意識や消費動向を学んだり、販売スキルが身についた。</p>	A	A	
	進路支援	<p>○課題解決能力の向上による優れた農業経営者等の育成</p> <p>【取組】 ○地域課題解決を目的としたプロジェクト学習を実施した。地元企業と連携した課題としては、日向夏を使った肥育牛の給与試験、食品残さ等の肥育豚への給与試験を行った。</p> <p>【成果】 ○全員がプロジェクトの成果を取りまとめることができた。九州大会への出場はなかったが、課題解決能力の向上に繋がった。</p>	B	B		
キャリア教育	進路支援	<p>○全員の進路目標の実現</p> <p>【取組】 ○学科会での進路指導や3者面談を実施するとともに、日頃から個別面談を行った。</p> <p>【成果】 ○現時点で30名中29名の進路が決定し、1名が未定。就農率は69%と担い手確保、育成に繋がった。内訳は、即就農5名、法人就農15名、農業団体1名、公務員1名、農業・食品関連5名、海外研修生1名、進学1名。</p>	A	A		
	資格取得等	<p>○畜産経営および就職に必要な資格取得等の推進</p> <p>【取組】 ○家畜人工授精関係の講義・実習や削蹄実習などを行った。また、本人の希望に基づき、各種の資格試験受験をすすめた。</p> <p>【成果】 ○家畜人工授精師24名(牛22名、豚2名)、2級認定牛削蹄師22名、家畜商14名、家畜受精卵移植師12名(予定)、農業簿記3級5名など</p>	A	A		

フードビジネス専攻（両学科共通）	専攻の教育目標 (育てる学生像)		作物、野菜、果樹、畜産物などの素材生産から、その素材を利用した食品加工、県内食品業者との連携による新商品開発、模擬会社システムによる流通・販売に至るまでの学習を通して、これからの新たな農業ビジネスに幅広く対応できる柔軟な発想力とスキルを身に付ける。				
	評価項目		平成30年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
	農業教育	講義・実習	○食品加工や新商品開発から流通・販売までのフードビジネスに関する総合的知識・技術の習得	<p>【取組】</p> <p>○食品製造実習においては、製造実習だけではなく、食品の水分活性やPHの測定等により、安全な食品づくりに努めた。</p> <p>○専門家による食品表示や賞味期限やHACCPの講義、南九州大学では、食品の機能性や食品基礎実験、食品開発センターでは「5つの基本味の試験、官能評価法」など、食品に関する専門的な知識・技術の習得を行った。</p> <p>○模擬会社は、昨年5月に本格的に開業し、運営方法や価格設定、簿記記帳、販売活動、会計業務等、「会社経営演習」の受講者を中心に助言した。</p> <p>【成果】</p> <p>○食品製造実習に力を入れた結果、商品アイテム数が昨年度と比較し大きく増加した。(H29:8アイテム26種類→H30:12アイテム44種類)</p> <p>○製造した食品の製造から販売までの基本知識(食品表示や賞味期限設定、価格設定など)等、フードビジネスに関する実践的な知識を深めることが出来た。</p> <p>○模擬会社の運営を通じて、価格設定の重要性を認識すると共に、イベント等の直接販売を通じて、コミュニケーション能力の向上につながった。初年度であるが、黒字で終了することが出来た。</p> <p>○会社の運営強化のために、POP広告クリエイター検定や商業簿記への挑戦など、学生の意欲の向上にもつながった。</p>	A	A	・農大校は実践的な学習をする学校であってほしい。 ・模擬体験や疑似体験も必要なことである。
プロジェクト学習		○地域課題を踏まえたプロジェクト活動の実践	<p>【取組】</p> <p>○「一般社団法人みやPEC推進機構」と連携し、県外の有名パテシエによる菓子製造実習を実施した。</p> <p>○地域特産品(釜炒り茶、トマト、豚肉、ゴマ、牛乳等)を活用した商品開発や模擬会社活動など、プロジェクト活動への指導助言を行った。(2年生14名:12課題)</p> <p>○宮崎市内の食品企業と連携し、アスリートフードとして注目されている機能性の高い食材(レッドピーツやトマト)を使用したレトルトカレーの開発に取り組んだ。</p> <p>【成果】</p> <p>○同機構のスイーツプロジェクト(宮崎市内の高校・専門学校・大学が対象)において、「芋とゴマのチーズまんじゅう」が最優秀賞を受賞するなど、レベルの向上にもつながった。(応募数206品)10～11月にかけて、市内菓子店において実際に販売された。</p> <p>○プロジェクト活動を通じて、県産農産物の状況や活用方法など課題解決方法を学ぶことが出来た。</p> <p>○食品企業との連携により、実践的な技術に触れることにより、食品関係で活躍する担い手として意欲が高まった。</p>	A	A		
		○国庫事業等を活用した人材育成	<p>【取組】</p> <p>○本校が外部機関に委託した「食品加工人材養成塾」において、一般受講者(食品企業や個人)と共に、1年生9名が受講した。</p> <p>【成果】</p> <p>○知的財産権(特許や意匠)など商品開発に必要な実践的な知識や技術を学ぶことが出来た。</p>				

	評価項目	平成30年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
フードビジネス専攻（両学科共通）	キャリア教育	進路支援 ○県内の農畜産業を支え、フードビジネスに対応できる柔軟な発想力とスキルの習得	【取組】 ○10月中旬から4週間、県内の食品関連企業（10カ所）において、食品関連企業実習を行った。（2年生14名） 【成果】 ○内定後の研修であったため、就職前における職場での心構えやお客様とのコミュニケーションの取り方等、研修成果が見られた。	A	A	
		○宮崎県の農業及びフードビジネス産業等を支える人材の育成	【取組】 ○本校で開催される「法人マッチング会」は、食品関係企業等にも対象を広げて、参画事業所への働きかけを行った。 【成果】 ●マッチング会に参加する県内の食品関連産業は少なかったため、来年度も引き続き、学生の進路実現に向けて、働きかけを強化する必要がある。 ○県内におけるフードビジネスを支える食の担い手として、農業法人や食品関連企業への就職が決定した。	B	A	
	資格取得等 ○6次産業化や食関連産業への進路を見据えた資格取得の推進	【取組】 ○保健所開催の「食品衛生責任者講習会」については、フードビジネス専攻1年生全員が受講した。 ○専門家を招聘し、食品表示検定セミナーやPOP広告クリエイター検定、フードアナリスト検定など特別講義を実施した。 【成果】 ○食品衛生責任者 1年9名取得 ○初級食品表示診断士 1名合格 ○POP広告クリエイター検定 20名合格（1年5人、2年15人）※2月に1年5名が受験し、結果待ち ○就職活動において、食品に関する資格取得について、企業からの高評価を得られた。（特に、食品表示検定、食品衛生責任者等）	A	A		